昭和三年十一月十五日 第三種郵便物認可

昭和四年一月十五日 磐城中正新報 第七號 (一)

磐城中正新報

發行日 毎月一日、十五日
定價 一部 金拾錢
郵税共
廣告料 普通欄十二字詰一行 一回八十錢 塲所指定 同二十錢增
發行兼編輯人 安澤榮作
印刷人
發行所 福島縣平町舊城跡四 磐城中正新報社

富貴は青少年時代に握れ（其二）

平町 城山隱士

皆さん『私は前に富貴は青少年時代に握れ』と斯う申しましたら、皆さんの中には其題目だけは分つたが富と貴とは未我手に來らない今に其形跡だも來らないものを、握れなどゝ仰せらるゝは、是は空論だ、むだ話だ、聞く價値が無いなどゝ申さるゝであらうと思ひます、成るほど是は一應尤もな事である、握る物で無いのに之を握れとは、是は或は御無理かも知れません併しながら私は決して空論を申す譯ではございませぬ、むだ話を、此貴重なる紙面を汚して長い間所謂長談義を致しまして何の役に立ちますか私は決して空論を申すのではありませぬ。實論を申すのであります、又今日の學問は喋々喃々口角泡を飛ばして、昨是今非甲論乙駁、致しまするが、詮じつむれば何の役にも立たぬ虚學に、大勞力を空費する世の中だと云ふ、私は之を知つて居りますから。決して虚學を主張するのではなく、所謂實學を申すのであります、然らば實學とは何か、申すまでもなく、實學とは實際に役に立つ學問で虚學は其反對で實際に役に立たぬ學問を云ふのであります・併しながら是は是れ私の發明でも發見でもなく疾くの昔に二宮先生に依つて唱へられた事であります曾て二宮尊德先生が御在世中、相馬藩士で德川氏の大學校卽ち昌平黌を卒業した大學者、高田高慶氏が二宮先生に面會致したいとて面會を申し込んだ事があり其時高田高慶氏の意中には何二宮尊德などゝ學問も致さない一村老が報德學などゝ主張するのが片腹痛い我々は相馬藩の進士たる大學者である、何二宮に後れを取るものか、頓て二宮と云ふ無學者は我が相馬藩主の招聘に應じ我が相馬に來り藩制を改革すると云ふ事であるから其相馬に來らない前に、二宮に面會して痛棒を一本與へてやらうと、大なる意氣込でそこで二宮先生に、面會を申し込んだのであります、處が二宮先生は何思ひましたか、高田高慶と云へば人も知る相馬藩の大學者である、今日自分の如き學問も何も致さない一老人に、何の必要があつて面會を申し込んだのである、是を私の報德學では實に忙しい。面會か今日は實に忙しい。面會の餘裕が無いから面會出來ないと申せとて小使に謝絶せしめた、然るに高田高慶氏に於ては、是非面會をしたいとて再三再四の請求であつたから遂に面會する事になつた。其時高田高慶氏は何面會謝絶となつたの意中では何面會すれば自分の返答に困るから夫で面會を謝絶するのであらう、よし／＼是非面會致して一杯喰はしてやらうとて／＼强剛談判を求めらるゝとは、頓と其意を得ぬ拙者は未曾で文字訓話の字は學ばぬ又未曾て社會に實益を爲さぬ虚學は學ばぬ、然るに何を苦んで遠路をたどり面會を要せらるゝかと、疊み返して申された、そこでさすがの高田高慶氏も心中密かに大に怒り何此村字究奴、今に見ろと顏色大に變はるを見て取り、貴下は大學者であるから、豆と云ふ文字は必ず書けるであらうが、兎に角書考證の字などゝ、日も亦足らずに書籍に沒頭した而して得る所のものは何等一つも社會に實益をなさぬ是は成るほど先生の仰せらるゝ樣に學問に實學虚學の區別はあるワイと、驀然大に悟り前の怒りは何處へやら、遂に禮を厚ふして先生の門に入り後に報德記などを書いた、報德學の大家となつたのである、私も二宮先生の實學の如く實學を申すのに虚學を申すのではない、然らば話は前に戻つて富と貴とを握るには、どうするとは申せ、只白き紙に黑き文字を書きたるだけ之を申し上げんとするに當つて其前に申し上げねばならぬ事がある。それはすべて事は一朝一夕に俄に完成するものでは無い、必ず我か手の内の物に相違ない人物はないと斯う言ひたい、又此反對に貧賤をたどる者は先づ第一に富貴を得るの道は禪宗の坊樣では無いか『此日是好日』と朝早く起き た時今日一日は是れ好い日であると中心より覺悟する のであります、勿論一年三百六十五日毎日々々好い日ばかりは無い、雨の降る日もあれば風の吹く日もあり雪の飛ぶ朝もあれば霰の落つる夕もある荒れ狂ふ日があるとて荒れに任かせて咒いら立てば遂に其日は徒に空費するそこで朝早く起き て是日一日だけは是好い日であると如何なる故障をも困難をも打ちこらへて心に覺悟すれば是日一日憂愁の中に暮す者もなく、忿怒の中に費す者もなく必ずや一日を徒に費さないで有意義に暮す事になる斯く有意義に其日を暮す覺悟を立てゝ次に古人の所謂今日一日の事を實行する

今日一日の事

一、今日一日決して腹を立つまじき事

二、今日一日虚言をいはず無理を爲すまじき事

三、今日一日人の惡口をいはず我が善をいふまじき事

四、今日一日の存命を喜び家事を大事に勤むべき事

五、今日一日四つの御恩君と國と親と師を忘れず不足言ふまじき事

右は今日一日の慎にて候

日ありと油斷をなさず

忠孝も今日一日と

はげみつとめよ

次く

の報德學では、虚學と申すのである、私の實學はそんなものでは無いとて、オイ小使豆を持つて來いと命じて豆を倉より持ち來らしめ之を高田高慶氏に示して曰く、此は私の豆でござる此豆は之を鳩に與へれば鳩も喜んで食し、之を牛馬に煮て與ふれば牛馬も喜んで食し又我々が之を食すれば實に滋養分が多く豆腐も出來れば、醬油も出來るのである、是を私の報德學では實を申すのであります、と話されたと云ふ事である、山遠く江戸に出で訓話の學は誇大妄想狂の一種で一つ、事が出來得ないのは元よ氏、自分は故郷を離れて海はあるワイと、驀然大に悟り前の怒りは何處へやら、遂に禮を厚ふして先生の門に入り後に報德記などを書いた、報德學の大家となつたのである、私も二宮先生の實學の如く實學を申すのに虚學を申すのではない、然らば話は前に戻つて富と貴とを握るには、どうするとは申せ、只白き紙に黑き文字を書きたるだけ之を申し上げんとするに當つて其前に申し上げねばならぬ事がある。それはすべて事は一朝一夕に俄に完成するものでは無い、必ず

同じ高峯の月を見る哉

峯に登り得るものではない世に一攫千金を夢みる者が多いが是は到底達し得べからざる希望で、所謂空想或り方法では到底其目的を達すの目的を達するのに二つの空費するそこで朝早く起き て是日一日だけは是好い日であると如何なる故障をも困難をも打ちこらへて心に覺悟すれば是日一日憂愁の中に暮す者もなく、忿怒の中に費す者もなく必ずや一日を徒に費さないで有意義に暮す事になる斯く有意義に其日を暮す覺悟を立てゝ次に古人の所謂今日一日の事を實行する

今日一日の事

一、今日一日決して腹を立つまじき事

二、今日一日虚言をいはず無理を爲すまじき事

三、今日一日人の惡口をいはず我が善をいふまじき事

四、今日一日の存命を喜び家事を大事に勤むべき事

五、今日一日四つの御恩君と國と親と師を忘れず不足言ふまじき事

右は今日一日の慎にて候

日ありと油斷をなさず

忠孝も今日一日と

はげみつとめよ

次く

や因つて來る所がある、古人曰く『すべて事の成るはなるものでは無いとて、オイ成るの日に成るにあらず必ず因つて來る所あり』と斯う申す通りで皆樣が將來尊い身分の人に爲りたい、又金滿家に爲りたいと希望した處で決して一朝一夕に成るものではありませぬ、小使を持つて來いと命じて豆を倉より持ち來らしめ之を高田高慶氏に示して曰く、此は私の豆でござる此豆は之を鳩に與へれば鳩も喜んで食し、之を牛馬に煮て與ふれば牛馬も喜んで食し又我々が之を食すれば實に滋養分が多く豆腐も出來頂、

同じ高峯の月を見る哉

で、未曾て一足飛びに最高峯に登り得るものではない世に一攫千金を夢みる者が多いが是は到底達し得べからざる希望で、所謂空想或り方法では到底其目的を達すの目的を達するのに二つの空費するそこで朝早く起き て是日一日だけは是好い日であると如何なる故障をも困難をも打ちこらへて心に覺悟すれば是日一日憂愁の中に暮す者もなく、忿怒の中に費す者もなく必ずや一日を徒に費さないで有意義に暮す事になる斯く有意義に其日を暮す覺悟を立てゝ次に古人の所謂今日一日の事を實行する

今日一日の事

一、今日一日決して腹を立つまじき事

二、今日一日虚言をいはず無理を爲すまじき事

三、今日一日人の惡口をいはず我が善をいふまじき事

四、今日一日の存命を喜び家事を大事に勤むべき事

五、今日一日四つの御恩君と國と親と師を忘れず不足言ふまじき事

右は今日一日の慎にて候

日ありと油斷をなさず

忠孝も今日一日と

はげみつとめよ

次く

は登山の準備、萬端異算なく行き届きて千里の道も滯なく攀ぢ登り得るのである、されば今日は卽ち身分尊き人に爲るされば是卽ち身分尊き人に爲る時代に富貴をみつしりと握つて貰ひたいと申し上げたのである、如何なる尊き身分の人々であります、要するに青少年が物資〳〵と物資をあされば身分は下劣に爲り下り又時代に發心して此一刹那よりは千里の遠きに至るには最初の一足下より出發し千丈の高きに登るには最初の一歩始まるの覺悟を以て出發の用意を嚴重にせねばなりませぬ、此旅行の用意、若し物資の豐富なる者が物資の豐富なる者が物資の豐富なる所謂富の持主でも何等社會國家の實益を爲さず只金と金をあされば人物下劣なる金持ほど恐るべきものなく、又金々と金をあさる貴族ほど恐るべき人物はないと斯う言ひたい、又此反對に貧賤をたどる者は先づ第一に富貴を得るの道は禪宗の坊樣では無いか『此日是好日』と朝早く起き た時今日一日は是れ好い日であると中心より覺悟する のであります、勿論一年三百六十五日毎日々々好い日ばかりは無い、雨の降る日もあれば風の吹く日もあり雪の飛ぶ朝もあれば霰の落つる夕もある荒れ狂ふ日があるとて荒れに任かせて咒いら立てば遂に其日は徒に空費するそこで朝早く起き て是日一日だけは是好い日であると如何なる故障をも困難をも打ちこらへて心に覺悟すれば是日一日憂愁の中に暮す者もなく、忿怒の中に費す者もなく必ずや一日を徒に費さないで有意義に暮す事になる斯く有意義に其日を暮す覺悟を立てゝ次に古人の所謂今日一日の事を實行する

今日一日の事

一、今日一日決して腹を立つまじき事

二、今日一日虚言をいはず無理を爲すまじき事

三、今日一日人の惡口をいはず我が善をいふまじき事

四、今日一日の存命を喜び家事を大事に勤むべき事

五、今日一日四つの御恩君と國と親と師を忘れず不足言ふまじき事

右は今日一日の慎にて候

日ありと油斷をなさず

忠孝も今日一日と

はげみつとめよ

次く

不況を餘所に四倉電氣會社の隆昌

社長新妻盛氏と中野捨與氏の奮闘

現時の不況に直面し各種事爲めに盡瘁し今日の隆盛を業の不振は勿論動もすれば見るに至りた事は好く人の種類に依つては全然事業の知る所である而して氏は温存立を可能的に脅威を受け厚篤實なる現今得難き模範てゐるものもある中に不況的好紳士にして一度人を信とは如何なるものかと言ふすれば決して疑心を挾まずと顔付して一割以上の配當を云ふ信條の人で又部下を愛續行してゐる事業は本縣の する事非常に深く常に從業誇として他縣より羨望の的員よりは慈父の如く慕はれとなつてゐる電氣事業であてゐる從業員は氏の爲めなる、就中濱通り方面で比較らば水火も辭せずと平素の的小資本で營業は益々好成愛顧を感激しつゝあるを見績を擧げてゐるは四倉電氣ても如何に氏が部下より慕株式會社である同社は今をはれてゐるが顯らかである去る十六年前の大正三年に又氏は四倉町會議員に擧げ資本金五十萬圓を以つて創られる事數回常に町自治の立した會社である創立當時圓滿と向上發展の爲めに努の社長で現社長の新妻盛氏力せし其の功勞は同町民一か推されて社長に就任し其同の感謝しつゝある所であ後一切の準備を整ひ同五年愈々營業を開始し爾來堅實一點張りで決して他に見る樣な浮華な營業振りは絶對になく社運は日に月に進展し基礎益々固く信用愈々厚く同業者中押も押されもせぬ一流の會社として一般より推奬されてゐる、斯く同社が隆昌を極め今後益々繁榮を期待される所以のもの は同社株主一同の誠意と從業員諸君の努力と奮闘は勿論なるも又新妻社長の功績は沒すべからざるものがある、同社創立と共に社長として就任し一意專心社業の

中野捨與氏

氏は本郡小川村の產職を敎育界に奉せし事多年轉じて事業界に入り四倉電氣株式會社に入社して茲に五年、此の間精勵格勤一日も倦まず能く社長を補佐し從業員を督勵愛撫し社業の爲めに日夜寢食を忘れて忠實に尊き犧牲的努力を拂へつゝあるは一般の認識する所である、由來氏は敎育畑出身丈けに其の學識々見は一頭地を拔てゐるは勿論手腕と財力とを具備せる稀に見る人格者で新妻社長の女房役としては適材適所である來るべき町會議員の改選には氏の如き人格者を推し大多數を以つて當選せしめ四倉町發展の爲めに盡力されたいとは同町民一般の聲である

同業新年宴會

去る十日午後六時より新田町末廣に於て同業者の新年宴會を開催したが來賓には猪狩平署長、伊藤、横地の兩特高係及び野崎縣議等で和氣靄々裡に午後十一時散會した、來賓鈴木縣議の事故缺席は頗る遺憾であつた

東實、吉村氏、常海、石井氏、福總、市島氏、磐公、山田氏、經濟、鈴木氏、實業、大和田氏、調査、馬目氏、商工、渡邊氏、磐城新報、高木氏、民政、金子氏、本社、安澤以上

祝電話開通

豐間村

電話三番　志賀牛乳舍　豐間支店
電話五番　鈴木金四郎
電話六番　遠藤惣三郎
電話七番　遠藤藤之丞
電話八番　鈴木政吉
電話十二番　鈴木鬼門
電話十三番　遠藤伊平次
電話十六番　石井清四郎
電話十七番　鈴木梅次郎
電話十九番　濱屋旅館
電話二十番　鈴木勇
電話二十二番　鈴木房次郎
電話二十四番　四家喜七
豐間料理屋組合

公周旋業
長谷川辰之助
平町南町

良品廉賣に勝る商略なし
磐城平町五丁目
磐城セメント株式會社特約代理店
和洋銅鐵金物問屋 久 釜屋商店
諸橋久太郎
電話九番　一三九番
振替貯金口座　東京一〇九五六番
確實敏捷は久の生命なり

特賣
たひら正宗　福島縣清酒品評會一等賞受領
花春　同優等賞受領
醬油釀造元
鹽屋　山崎合名會社
平町（電話一〇番）